

「同性愛者の“結婚”」を容認

本年10月21日、ローマ法王フランチェスコは同性愛者同士の“結婚”(シビルユニオン)を容認することを表明した。法王は今まで、公式に性的少数者(LGBT)に対する考えを表明したことはなかったが、この日初めて今まで胸の内に秘めていたLGBTに関する対応を公に表明したのである。法王の見解表明は、数分のうちに世界を駆け巡った。

法王の基本的考え方は次の通りである。人は皆神の子であり、すべての人は家庭を持つ権利がある。誰一人として、蚊帳の外に置かれず、家庭を持たないために、不幸であってはならない。全人類はその一つの家族であり、それゆえ各個人は家族を有する権利を持つのである。

この考え方から、人間は誰一人として社会から疎外されてはならないという。神から望まれた家族は、男と女の間の結婚からも成り立てば、またそうでないタイプの人間の結びつきもあってしかるべきだ。法王はアルゼンチンにおける司教の時代から、市民がどういう立場であれ、互いに結びつき、家庭を築くと言うことに賛成していた。

法王は言う。「個人がどんな立場であろうと、たとえLGBTの人であろうと、神の子供であることに違いはない。LGBTの人であろうと、神を探し求める権利はあるのだし、善意を持って判断できるのだ」と。

法王はまた、自らの思いをこう語った。「先ず自ら祈りなさい。他人を非難してはいけません。他人を理解し、対話をしなさい。そして、その人が自分自身を表明する立場を与えなさい。他人が、男であるとか女であるとか、またそのあり方にこだわりを持ってはいけません。むしろ、自分が父であり母であることを示めしなさい。あなたはあがまままで、(神からみれば)私は男の子であり、女の子であるのです」と。

ヴァチカン内でのさまざまな意見

このような法王の公式表明により、これからどのようにヴァチカン内で同性愛についての意見をまとめ、一本化するというのが問われてくる。では、現在、ヴァチカン内ではどのような意見が見られるのだろうか。代表的なものを紹介したい。

「賛成派—セメラロー枢機卿の意見」

最も法王に寄り添う立場に立っているのがセメラロー枢機卿だ。その意見は次の通りである。

一つの社会にあって、法律的に認められる形はさまざまだ。法王の意見はその一面を表している。一言で言えば、人を擁護することである。法王はすべての人の救済のために仲介役をつとめられている。同性愛者か同性愛者かにかかわらず、すべての人を何よりも神の子として見なければならぬ。先入見でレッテル貼りをしてはならないのである。

「反対派—メニケッリ枢機卿の意見」

これに対して明確に反対する立場を代表するのがメニケッリ枢機卿である。その意見は端的に次の通りである。

まず第一に、すべてのものは同等ではない。それゆえ全く同じように扱うべきではない。結婚は結婚であり、神が定めた秘跡の一つだ。この意味で、人間の愛は不可逆的な贈り物として理解されるべき絆である。そうでない愛の結びつきは神が定めた人間の本質的あり方とは異なる。一方、市民としての結びつきは贈り物というよりは、

むしろ人間が責任を持ってこの結びつきを生き抜くことを意味する。

「中間派—ミュラー枢機卿の意見」

ミュラー枢機卿の意見は微妙である。「中間派」としたが、内容的には「反対派」に近いと言ってもよいだろう。法王の意見を尊重しながら、次のように自分では明確に反対の見解を表明しているからである。

自分は常にカソリックとしての論調を貫いてきた。そうして法王を守ってきた。法王は神の代理者である。しかし、神の言葉を超越することはできない。神は人間を創った。男と女に創った。結婚の儀を司り、家族を構成したのである。自分はいつも法王の側にいるが、決して絶対的忠誠の立場ではない。是は是であり、非は非である。法王は神の代理であって、キリストではない。私は神を信じるものだ。同性愛者の結婚は法律的に認められるべきだろうが、教会としては、そのような家庭は認められない。別に同性愛者の人を責めているのではない。逆に、彼らを指導し、助けて、神の教えにそって、教会の教えに従わせると言うのが、私たちの務めである。神の言葉は永遠に真理である。男と女については、生物学的にも心理学的にもその完全性を理解しなければ、人間の将来はないだろう。教会として同性愛者の家族を認めることができないのは、キリスト教の考えから来ているのである。

以上見てきたように、今回の法王の同性愛者の結婚容認の談話は、法王の個人的な見解を公式に表明したとはいえ、ヴァチカンとしての公式見解ではない。歴代の法王の中にもその時、その時の問題について明確に理解していなかった。今後、同性愛者の結婚については、枢機卿の中でも議論が必要になってこよう。

法王第3回目の回勅にサイン

ローマ法王は、聖フランチェスコの誕生日の前日である10月3日、アッジジを訪れた。聖フランチェスコの名前を受け継いだ法王フランチェスコは、アッジジをとっても愛し、聖フランチェスコをとっても尊敬している。今回は特に、自分の第3回目の回勅を出し、それに署名するために訪れた。そして、聖フランチェスコの墓の前でミサをあげた。今回は、COVID-19の感染拡大を防止するため、多くの信者が集まらないように、私的司牧の旅としてアッジジに出かけたのだ。

法王は回勅の中でさまざまなことを述べているが、その主旨は「人間は兄弟姉妹である」、「人間はだれもが一つの船の上の共存者である」、そして「人間はだれも自分一人では生きていけない」ということにある。

法王は近世史上、人類のために貢献した人物を挙げている。福者チャールズ・アコール(1858～1916)、ガンジー(1869～1948)、マルティン・ルーサー・キング(1929～1968)、デズモンド・ツツ(1931～)といった人々だ。また、国連の任務とその「改革」を強調し、「核廃絶」と「ショーア」の形骸化を阻止することを訴えた。さらに、COVID-19の蔓延の下、世界の人間が相互に助け合い、人格を認め合い、そして移民の権利を認めるべきことを主張した。

聖フランチェスコはイスラムのイマム・アーマド・アル・タイエドに会い、対話を行っている。今回それを踏まえて、世界中の人が対話を重視すべきであることを述べたが、とりわけ聖フランチェスコが行ったように、イスラムとの対話を強調したのであった。